

べし。事かけて候わば、かたびらていのものなり。大進の阿闍梨等にいゝあわせて、ひたゝれ、よきものにはかたびら・ぬのこそで、三人して計あわせ給。

## 小乘大乘分別鈔

文永十年（一二七三）。五十二歳。於佐渡一谷。二十三紙断  
小湊誕生寺外二十ヶ所現存。（定七六九頁）

夫小大定なし。一寸の物を一尺の物に対しては小と云、五尺の男に対しては、六尺七尺の男を大の男と云。外道の法に対しては一切の大小の仏教を皆大乘と云。「大法東漸」「通指仏教以為大法」等と積する是也。仏教に入ても鹿苑十二年の説、四阿含經等の一切の小乘經をば諸大乘經に対して小乘經と名たり。又諸大乘經には大乘の中にとりて劣る教を小乘と云。華嚴の大乘經に「其余樂小法」と申文あり。天台大師はこの小法といふは常の小乘經にはあらず、十地の大法に対して十住・十行・十回向の大法を下して小法と名と積し給へり。又法華經第一卷方便品に「若以小乘法、乃至於一人」と申文あり。天台・妙樂は阿含經を小乘というのみにあらず、花嚴經の別教、方等・般若經の通・別の大乘をも小乘と定む。又玄義の第一に「会小歸大、是漸頓混合」と申積をば、智証大師は始め花嚴經より終り般若經にいたるまでの四教・八教權實諸大乘經を漸頓と積す。混合と云者、八教を会して一大円教に合とこそことはられて候へ。又法華經の寿量品に「樂於小法、德薄垢重者」と申文あり。天台大師は此經文に